

横浜ダンスコレクション2016 コンペティションII

全体のレベルが高く、どの作者が受賞してもおかしくないと感じました。逆に言えば議論を生むような作品はなかったとも思います。みんな微妙な差異の中で創作し、競いあっているように見えました。良く言えば繊細で丁寧、悪く言えば狭く窮屈。僕は日常的にダンスを鑑賞しません。そんな僕が抱くダンスへの貧弱な固定概念を揺さぶって欲しかったです。

なにを語ろうとしているのか。なぜそれを作品にするのか。どうやってそれを作品にするのか。その作品は誰にどんな影響を与えるのか。

他人のダンスをなぞるのではなく、自分のダンスをつくって下さい。

僕も自分の演劇をつくります。いつか創作の現場で会いましょう。

劇作家・演出家 / ままごと主宰 柴 幸男

今年もコンペIIは、全体のクオリティはコンペIと肩を並べる高い水準で、もはや年齢層だけの違いとなった感がある。舞台設備など限られた条件のなか、20歳前後の自意識を精いっぱい羽ばたかせて、世界と関わっていかうとする果敢さに胸を打たれた。

最優秀賞の田村興一郎は、昨年に引き続き、自然界における異種間のスリリングなわたりあい、生と死のコントラストを描き出した。カフカの短編を読むような不条理で荒涼とした世界をミニマムな要素に凝縮して見せ、作家性の高さを発揮した。

奨励賞の江上真子は、クラシックバレエで培った身体の使い方とコンテンポラリーの身体言語を巧みに駆使しながら、日常の出来事で噴出する小さな負の感情を客観的な仕草であつかい、威勢のいい伸びやかさで眼前に拡げてみせた。

他のファイナリストについてもひと言ずつ評したい。

酒井：テーマはユニークで、四肢の表情は鋭敏で豊か。音楽を頻繁に変えず空間を立体的に使うことで求心力を高められたはず。

柴田：コンテンポラリーには珍しいフェミニンで華やかな表現力を生かして、より具象的なモチーフに挑戦してほしい。

栗屋：女性性をあつかったテーマを軽く逸脱し、2人の身体が2.5倍ほどのスケール感を纏う大きな躍動感が魅力的。

坂藤：美術作品のようなコンセプトが立った作品で新鮮。虚実曖昧な独特の世界を、身体訓練のもとでより発展させてほしい。

下島：「思考の奴隷である肉体」という古来のテーマを描いたコミカルな見せ場はアジアの祭祀や民族舞踊を思わせ、印象的。

大北：教育の現場から生み出された既視感のないみずみずしい動きや仕草を強みに、独自の身体言語を開拓して行ってほしい。

涌田：短歌という心情のスケッチを歌とダンスで表現する試みは意欲的。閉じた貝が開くような一本気さを逆手にもっと生かしていい。

内田：双子という類い稀な素材をもっと歴史的に掘り下げ、研究し、かっこよくキメすぎずにもっとドギツク遊んでほしい。

栗原：ちょい斜め上な視点が興味深いコンセプチュアルな作品。微細な動きの変化で目を惹きつけるセンスを伸ばしてほしい。

山口：力の漲る身体表現力をもつ2人の呼吸が命で、戦争画を彷彿させる作品性も秀でていた。僅差なので再挑戦を望む。

アートプロデューサー・ライター 住吉 智恵

力作ぞろいで、さまざまな可能性に満ちたコンペティションだった。最優秀新人賞の田村興一郎『飼育員』は、内なる暴力性を生のまま見せるのではなく、抽象化した上で提示するその手さばきが見事。次は長編が見たい。奨励賞の江上真子は、昨年から驚くほどの飛躍を見せた。彼女の『世界中の誰もが自分の不愉快に敏感に生きている』は、動きにも構成にも一筋縄ではいかない歪な手触りがあり、それが大きな魅力を生んでいた。そのほか、攻めの姿勢を貫いた酒井直之『アンチクトン』、おおいに笑わせてもらった下島礼紗『わっぜ』、男同士の濃密なデュエットを見せた山口将太郎『Conjoined-ONE-』も心に残った。

新書館「ダンスマガジン」編集委員 浜野 文雄

五箇条 - ① 動きの必然性 ② オリジナル性 ③ ひらく ④ 裏切り ⑤ 問題意識

これは私が積んだ経験上の五箇条であり、ただの五箇条、されど五箇条ですが全くこれに縛られることなく誰に何を言われようが「いまの踊る動機」を信じてやりたいことをとことんやってください。やりたいことをやる強さを、完成度よりもたとえ荒削りでも勢いのあるものを。そして、表面的なところにとどまらず、自分のコントロールのきかないところまで冒険すること、作品からはみ出ること、作品をぶち壊すこと。ぶち壊した先にいる俯瞰したもう一人の自分と出会うこと。

舞台上で踊りを人にみせることはどういうことか…探し続けてください。

振付家・ダンサー 森下 真樹

コンペティションIIの存在意義やその目的といったものを特に意識し審査した年であった。コンペティションIIとは、コンペティションIに比べ、ダンスの常識にとらわれない可能性や、テクニックや経験よりも生そのものをダンスに置き換えられる、そんな場にしていけたら良いのだと思う。そして順位や入賞というものにこだわらず、自分自身の物差しや肉体や世界との関わりを持つこと。それが結果に繋がるのだと思う。ダンスを超えて表現して欲しい。

さて、審査発表の講評でも述べた通り、ダンスとは肉体の悪用にほかならない。逆説的ではあるのだが、それがいかに正当性を得ることができるのか。

特定の場所やある建物という固有のトポスにとり憑く幽霊について述べた。幽霊はひとつの比喻でもあるのだが、モダニズムと呼ばれる均一空間において何時でも何処でも再現性のある表現ではなく、いかに固有の空間や時間を幻視できるのか。特定のトポスとは特定の場所や建物という意味に留まらず、我々自身の肉体にも当てはまるはずだ。特定の固有の肉体を持つダンサーであるならば、「私」という現象が何を指し示すのか。そこから発し固有の肉体に宿る幽霊を引き出すこと。コンペティションIIの存在意義は肉体に宿り、もしくは憑依する制御できない何ものかについてを、より豊かに、より狂おしく、そしてより超越して関わるることができる場であるはずだ。

美術家 ヴィヴィアン佐藤